



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	捜査面接における面接者のラポール構築方略と発問タイプが被面接者から得られる情報に与える効果〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	山本, 渉太
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12521号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65382
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Shota_Yamamoto_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：山本渉太

学位論文題名

捜査面接における面接者のラポール構築方略と発問タイプが
被面接者から得られる情報に与える効果

被疑者、被害者、目撃者などから得られる供述は、事件や事故の真相解明において重要な役割を果たす。近年、被疑者取調べの録音録画が法制度化され、子どもの被害者への事情聴取では警察と他機関との連携が推奨されるようになった。また、警察庁は心理学的知見、特に面接者と被面接者の「ラポール」（良好な人間関係）を構築する方略や、情報収集に適した発問タイプの研究成果を踏まえた捜査面接の教本を作成した。このように、近年、捜査面接法のあり方には大きな変化が見られる。

従来、ラポール構築方略や発問タイプの研究は、実験や調査、現実の捜査面接の分析などにより行われてきた。ただし、これらの研究の多くは海外で行われており、日本の法制度や文化的背景を踏まえた実証的な検討は限られていた。本論文では、捜査面接を取り巻く日本の現状や先行研究を考慮しつつ、捜査面接において特に重要だと考えられているラポール構築方略、ならびに発問タイプについて検討した。本論文は5章から構成される。以下、それぞれの内容について述べる。

1. 序論（第1章）

ここではラポール構築方略と発問タイプを中心に、捜査面接に関する先行研究のレビューを行った。諸研究によりすでに得られている知見を整理した結果、次の2点について所見を得た。①ラポール構築方略については「人道的な方略」と「支配的な方略」があること、前者の方が有効であることなどを確認した。また、複数の方略を含む一般的な「戦略（方略の集合）」の研究と、個別特定の「方略」の研究とが混在していること、具体的にどのような手続きがラポール構築を促進するのかを明確にすることが必要であることなどの問題も明らかにした。

②発問タイプにはオープン質問（自由再生質問：「何がありましたか」「それから」などの質問）、WH質問（焦点化質問：「いつ」「どこ」などの質問）、クローズド質問（選択式質問：「Aですか」や「Aですか、Bですか」等の質問）があるが、被面接者から正確な情報を多く引き出すためにはオープン質問が有効であること、捜査面接においてもオープン質問は重視されるべきであることを確認した。一方で、現実の面接においては、面接内のどこでどのような発問をするのかが重要であるが、時間的情報（面接の序盤、中盤、終盤等）を考慮した発問研究は少ないことが明らかになった。ここでのレビューを踏まえ、ラポール構築方略と発問タイプにつき、第2章では質問紙調査、第3章と第4章では実験研究を行った。

2. ラポール構築方略についての質問紙調査（第2章：研究Ⅰ）

第2章では、ラポール構築方略に焦点を当てた調査を行った。

効果的なラポール構築に関する意識を調べるため、捜査員740名を対象とした質問紙調査を実施した。調査は、「協力的」ないし「非協力的」な態度をもつ3種類の被面接者（被疑者、目撃者、被害

者)のいずれかを想定した場合、どのような方略をどの程度用いるべきだと思うか、65項目について評価を求めるものであった。得られた評価値につき因子分析を行った結果、①方略には「準備導入(事前に準備する)」「配慮(配慮を示す)」「対立(対立する)」「人物理解(相手を理解する)」「接近(心理的に接近する)」「事件話題(事件のことを話す)」「端緒探索(事件と関連ないことを話す)」があること、②捜査員は、どの被面接者に対しても「人物理解」や「端緒探索」を用いるべきだと評価し、「対立」は用いるべきでないと評価していること、③被疑者に対する面接と、被害者や目撃者に対する面接では評価に異なる部分があること、④協力的か否かという被面接者の態度は、評価にあまり影響を及ぼさないこと、⑤経験のある捜査官は経験のない捜査官よりも、各方略を用いるべきだとする傾向が高いことが明らかになった。

3. チャットを用いた有効な発問タイプの実験的検討(第3章:研究Ⅱ)

第3章では発問タイプとそれが引き出す情報の量に焦点を当てた研究を行った。実験にあたっては、パラ言語情報を排し、言語情報に焦点を当てるために、チャットのソフトウェアを用いた聴取場面を設定した。実験参加者は34組の「面接者役」と「被面接者役」の捜査官のペア、計68名であった。被面接者役に動画を提示し、その後、面接者役が被面接者からチャットにより動画の内容の聴取を行った。その結果、①聴取のどの段階でも、オープン質問は情報を得る上で有効であること、②クロージド質問を用いる場合は、面接の前盤よりは中盤以降で効果的であることが明らかになった。

4. ラポール構築と発問順序、および被面接者の要因の実験的検討(第4章:研究Ⅲ)

第4章では、研究Ⅰ、Ⅱで得られた成果を踏まえ、ラポール構築方略と発問タイプが被面接者からの情報の量や質に及ぼす影響について検討した。実験計画は、発問の順序(オープン質問をクロージド質問の先に行うか/オープン質問をクロージド質問の後に行うか)×面接者のとるラポール構築方略(配慮/配慮+端緒探索/統制)であった。面接者は実験者(申請者)が務め、大学生88名が被面接者となった。なお、被面接者の性差や性格特性についても検討した。

実験は個別に実施した。まず、被面接者にビデオを呈示した後、面接者は被面接者に対し、その内容を聴取する面接を行った。その際、面接者は、上記の6条件に応じて「オープン質問を先に行うか/後に行うか」し、かつ「目を合わせうなずくなどの配慮を示す(配慮条件)/配慮に加えて内面的な話をする(配慮+端緒探索条件)/配慮も端緒探索もしない(統制条件)」のいずれかの態度で面接を行った。その結果、①正確な情報はオープン質問において圧倒的に多く得られること、②ラポール構築については、配慮条件で面接者に対する印象評価が高く、クロージド質問に対して得られる正情報量が多いこと、③配慮+端緒探索条件では、それ以外の条件よりも、クロージド質問で得られる情報の正確性が高いこと、④発問順序については、オープン質問を最初に行った場合、オープン質問で得られる情報の正確性が高いことが示された。また、個人特性としては、⑤男性参加者の方が女性参加者よりも誤った情報が多いこと、⑥被面接者の性格特性と得られた情報の質や量には一部関連があることが示された。

以上を踏まえ、第5章の全体考察では、被面接者が被疑者や被害者である場合も含め、有効な捜査面接方法や、こういった方法に関する訓練方法につき考察した。